

遊行柳

(能)

シテ 佐野 由於

ワキ 平木 豊男

ワキツレ 北島 公之

間 荒井 亮吉

大鼓 亀井 洋佑 太鼓 麦谷 暁夫
小鼓 住駒 幸英 笛 室石 和夫

後見 藪 俊彦
高橋 憲正
福岡 聡子

地謡 米島 和秋 佐野 玄宜
高野 秀幸 大坪喜美雄
長野 裕 渡邊 茂人
山崎 健 川島 英治

休憩 二十分

茶壺

(狂言)

すっぱ 能村 祐丞

中国の者 中尾 史生
目代 山田 讓二

後見 清水 宗治

邯鄲

(仕舞)

渡邊荀之助

地謡 佐野 弘宜
広島 克栄
高橋 右任
大澤 永靖

舎利

(能)

ツレ 木谷 哲也

シテ 藪 克徳

ワキ 苗加登久治

間 炭 哲男

大鼓 飯嶋六之佐 太鼓 大橋 紀美
小鼓 住駒 俊介 笛 江野 泉

後見 高橋 右任
松田 若子

地謡 水口 純治 佐野 弘宜
酒井 章 島村 明宏
館 聖 高橋 憲正
田屋 邦夫 松本 博

能遊行柳 (ゆぎようやなぎ)

諸国遊行の聖たち (ワキ・ワキツレ) が上総の国から奥州をめざします。白河の関を過ぎ道が幾筋も分かれていた所です。老人 (前シテ) に出会います。老人は先年遊行の上人が通ったという古道を教え朽ち木の柳に案内します。古道だけに人跡も絶え、荒れ果てた草むらの古塚の上に名木の柳が朽ち残っています。昔西行が「清水流るる」と歌に詠んだ川岸に水は絶えましたが、その由緒を老人は懐かしむ様子です。老人は聖から十念を授かり、古塚に寄り添うように消え失せます (中入)。朽ち木の柳が言葉交わすと知った聖たちは終夜念仏を唱えます。やがて朽ち木の柳から烏帽子・狩衣姿の白髪の老人 (後シテ) が現れて、柳の精は草木までも成仏できる教えを喜びます。彼岸に至る一葉の舟といえは柳の徳、そして玄宗皇帝の華清宮の楊柳、清水寺の楊柳観音、蹴鞠の庭の柳。柏木の恋には無縁な古い木の柳は、聖の夢に弱々とした報謝の舞を奏でる歌舞の菩薩と見られます。

狂言茶壺 (ちやつぽ)

茶壺を担って帰る途中に道端で居眠りをした若者、その荷物に目をつけて奪おうとするすっぱ、仲裁に出て結局は我が物とする所の目代、の三者が絡みます。若者の言う茶の入れ日記によれば、主人は中国一の法師、一族の寄り合いに本の茶 (明恵ゆかりの梅尾の茶のこと。よその産地の茶は「非の茶」を点てようと、五十貫のくり (茶壺) を持たせて、若者を買いにやらせましたが、若者が昆陽野の遊女に誘われ、酔っ払ってこの始末です。

能舎利 (しゃり)

出雲の国美保の関を出た旅の僧 (ワキ) が、釈迦の遺骨仏舎利を納め韋駄天に守護された東山泉涌寺に参拝します。寺男 (アイ) の案内で仏舎利を拜んだ僧は仏入滅のいにしえ、足疾鬼が遺齒 (牙舎利) を奪い、韋駄天が奪い返した故事を思っって感涙に袖を濡らします。そこへ怪しげな里人 (前シテ) が参り合い、釈迦の涅槃や説法を偲んで、仏法東漸のしるし、この寺の仏舎利を称えます。そうするうちに俄に空がかき曇り稲光が走って、里人は足疾鬼の執心を名乗り、仏舎利をわが物とする望みを告げて、昔のままに奪い去ります (中入)。僧と寺男が守護神に祈誓して韋駄天 (ツレ) が駆け付けます。仏舎利を持つ足疾鬼 (後シテ) と韋駄天の俊足どうしの鬼ごっこは、天上高く逃げ翔り、または下界へ追い落とし、目の回るような闘争の果てに、仏舎利は取り返されて故事の再現となりました。寛正五年、六十七歳の音阿弥が熱演して健在を誇示したのが演能記録の初見です。